

2-25

3585

# 狐政學

全

鼻下長老校閱  
洒落齋居士著

明治廿一年  
子春刊行

文外



今で鐵無りせ  
 釣乱砲三總  
 今雜あた方論  
 の葉て花り方  
 民を抵の信  
 脱酒觸看  
 け々くの客  
 巧自由角を  
 回酒砥に馬  
 避義雪世辭て  
 油揚献々圓滑  
 の滑稽る狐陽  
 酒落釣氣無南  
 困

一山と卑  
 穴と其  
 中爲  
 一築  
 つ、洒落  
 齊居士  
 が、狐  
 政  
 著



言も出れず、故と言他て子守歌念々狐老の  
 腹鼓、静の調に、す狐と人の思信の正體現す  
 妙案は九、耶、及ばぬ黒助、荷、長老も一番魅れ  
 て、二和加然たる三番、叟、應來あれや、應來あれや  
 開設あれや、開設あれや、吾人想ふ廿三年より、後  
 へは延じと穩望、と紅、眼を瞋れぬやう  
 手早く筆を紙了ぬ、  
 迷池二舟逸、誰が頭をはる風の福日、浪華南  
 朶樓に於て、滅法會鼻下長老識す

狐政學

鼻下長老校閱  
 洒落齊居士著述

總論

向ふ先をみん  
 辯論より説き  
 起る筆も亦た  
 自由なる哉  
 自由美人の癖  
 鉄砲を喰つて  
 寝れる者ハ  
 少一  
 天吾に自由を與へ、然らば死を與へよ、と  
 云へば、世にも畏ろし、革命論の如く聞ゆれど、身  
 は一個、何の惜しかり、添れぬからは、どうせ病痾  
 に斃る身體、と云へば、戀と操れ二線を兼て、優敷  
 も亦た哀憐を覺ゆるとならん、去と佛蘭西人が  
 戀慕ひし、自由美人の性質も仙臺侯が通はれし  
 高尾太夫が心根も物こそ異れ理は一にて、慕愛  
 も戀、嫌却も戀、戀てふ文字に二義は無らん、併し

圓い雞卵も切様で四角物も言様で角が立つべ  
 ければ、縦令如何程道理ある事實なればとて向  
 鉢巻大脚坐眼に角立て談判れては、良心で諾と  
 云たくも、其場の体が瘵に障り、枉て意地張ると  
 もあらん、必竟斯る事未が因と爲りて、血雨似  
 蘭西の騷動ともなり、三父の船の提斬とも爲り  
 しならん、兎角浮世は望月の、丸鬚島田新蝶々、菜  
 の葉にとまる春景色、野山の草木と諸共に、笑ふ  
 て暮すが自由酒義よいくくく酔ひや醒  
 何でも吉野の花盛腹を立田や氣をもみぢ、愚痴  
 な小言は屁で飛ばし、自由眼犬猫狐化の河原の  
 地藏尊西れ河原の砂手本、いろは習ふて、はの字

去り乍ら當時  
 怒上月多し

眠犬も時あり  
 二吠るとあり

ノ  
 ー  
 く

助氣は眠犬に  
 吠られて起る

を忘れ、いろで苦勞をする墨の、薄くいあらで戀  
 衣質に流れて今は無し、昔を懐へば篠田の狐人  
 を欺せし懺悔草花も實もなき、正直正銘、白眞劔  
 の、天門論、寓意も無ければ故意もなく、花柳の穴  
 ばかりさつばた、黑白わかたぬ、妄言と笑へば笑へ  
 福の神、貧乏神か雪隠がみ、反古紙の皺をのばえ  
 禿頭筆を手に執て、熟々、按え奉るに、  
 天地萬物の元始は、水なりとも火なりとも云ふ  
 説あれども、或學士の説には、全く氣なりと云へ  
 り、併し氣にも食氣色氣、疝氣、動氣、なんど、其類の  
 多きとなれば、果して何氣より出來しにや、いと  
 不審しとて難する者もあれど、其昔し氣と以へ

英人に惚れ  
人に惚れ又た  
獨乙人に惚る  
如きハ浮氣の  
極

ば、只だ一個と定まり居りしものにて、今日の如  
く如彼氣如此氣、いや好氣だの惡氣だのと云ふ  
と無かりしが、中古輕薄風の吹くにつれ、浮氣て  
ふ邪氣が出来てより、次第に氣が多くなり、彼方  
へ變り、此方へ遷り、一向尻の据らぬ所から、石部  
金吉穴梨小町など云へる學者衆を、之を身む  
と限りなへ、書物を著すやら、演説を開くやら、種  
々手を尽して、昔氣擴張の事を圖りしとあり、  
ここで後世に至り、昔氣を堅氣と唱へ、釋迦牟尼佛  
か、イエスキリストの如く、崇め尊むに至りしもの  
のなり  
去ば昔々のまだ昔、ズット昔の初に於て、氣の輕

アタラカイを  
矢輝輝と映る  
勿れ

箇様な珍物を  
水産博覽會へ  
出品せば定め  
て一等妾

いものは、登り詰めて有頂天と爲り、氣の重い  
のは落ち着て眞地目と爲り、茲に始めて天地が  
立ち別れたり、故に天は動て、天動くとは諸遊星  
の動くを云ふ佛者の天動説と混ざる勿れ、陽な  
るも地は廻りて陰なり、陰陽和合の働きに依り  
て無數の物類生れ、限りなき現象を呈はし、山で  
高きはキマラと爲り、水で深きはアタラカイと  
爲れり、妻こふ牡鹿の戀が峯には、思ひ草、首ツ竹  
便り、松達まは椎、等生茂り、白波打ち揚る色の磯  
には、板貝、曼名貝、鰹、嬉鳥、賊、添鯛、椋子、鰯、等を産し  
また、浮川竹の沿岸迷が原には、水揚草、線香花、老  
蘭、三絃草、太鼓、檉、冷檉、吾魯、楓、等青々繁茂し、不夜

背の蓬萊へ今  
の應來

狐政學とハ穴  
をコセクリか  
へすの雨か

此一句ハ雜從  
の語の切て音  
れぬ餅言葉の  
経にて味ふべ

應鳥ハ時西の  
本長コメー

恐鬼好んで人  
の舌を食ふ

城外故財の森陰には、比翼鳥、月給鳥、鼻下鳥、意氣  
雁、間夫氣鳥、人氣鳥、及び新象、年馬、權屏、滿駝、槍手  
婆馬、仲猪、引狐、意想、狼、出暮、狎、等群、居せり、其他無  
宙間の森羅萬象を、列舉するには、名に負ふ七福  
神の寶船に、乗り込み、蓬萊州へ渡りて、幾久しく  
筆を執るに、おらざれば、逆ても出来べきと、にあ  
らす、況んや、紙數に、限りある、受合著作に、於てを  
や、マンマと、首尾よく、花柳社會の、政法を、書き散  
し、狐政學の、題名に、附會るを得ば、ア、ヲ、め、で、た、  
の、猿、丸、太、夫、奥、さん、の、楓、の、揮、子、流、した、で、腰、みる  
たび、に、穴、お、か、し、け、れ、と、腹、か、へ、て、吹、き、出、す、は  
累、か、喇、叭、か、白、海、の、津、を、さ、か、し、て、瞞、み、分、け、な

ば、意外の滋味や存すらん、

日論

日は實と音み、眞實惚れ樽の底より起りし、愛素  
と粹素の團塊にして、陽氣熾んなり、故に太陽と  
云ふ、太陽は色の木にして、彼の色深きも、色淺き  
も、心の赤きも、腹の黒きも、皆な其光に依て、分る  
なり、去ば太陽の光は、毎も明かにて、變るとは  
なけれども、折く、テレン、手管の雲起り、空泣の雨  
を降すに依り、善惡もわかぬ、戀の闇と爲り、毒鬼  
の横行するところ、こは日中にすめる鳥の業に  
て、其福云ふべ、鳥とて、之を惡む者多けれども、借  
一、獨、好、す、き、好、ん、た、る、眼、より、看、る、と、き、は、豈、良、も

倦狸ハ權利に  
あらず矢ッ強  
倦狸也

鶴を解ば自由  
を得くるふの  
結果也  
雪ハ豊年の瑞  
兆  
豆腐の音盤夫

鳥ハ徒夜怒ハ  
倦解  
色酒ハ町主

狐遊巷の仮屋  
たあらずば窟  
原の狸騒是れ  
亦御世の狐狸  
詞と云ふべし

笑歴の餘に漏れも何事も愛らしく思はる處か  
ら可愛鳥と云へり又た時ありて鼻息荒く叫ぶ  
により喜鳥又た嬉鳥とも呼べり其他伶俐鳥勸  
費鳥苦鳥等の号あり原來鳥の性は陰惡陰險に  
いて動もすれば眼犬を害し倦狸を咬み喰ふと  
あり曾て亞米利加とやらんにて多くの鳥をう  
ち殺しやれうれしやと歡天喜地家々にて祝酒  
を酌みしとありいと云ふ其時の様を想像りて  
或人の作りし夕暮の變唄は左の如し  
夕暮に繩の帯解く炭だわら  
雪の降るのに小なべ立て  
碎けた豆腐が煎るぞへ

アレ鳥もある葱もある

戸棚に銘酒があるわいな  
そも鳥は陰鳥にして日は極陽なり陽の陰にか  
つは當然の事なれども若し陰にして陽にかつ  
時は乍ち日蝕と爲り光影が黄色に見へ悪で蠅  
を逐ひ口の戸締が外れて涎の籠が地に垂る  
に至るべし而して此時鳥は阿房々々と叫ぶな  
り嗚乎是れ何等の惡鳥ぞや畏れ多くも十方無  
量の光明を垂れさせ給ふ大徳至聖の天日堀下  
を欺問し奉り剩へ洪恩を忘れて阿房の聲を發  
すると不忠とや云ん不義とや云ん若し吾々を  
して天日堀下の臣民たらしめば争でか其仁に

一轉厥心とば  
け得て妙

魂の餅は萩の  
餅か栗餅か

此脱眞ッ赤な  
嘘にあらず

無心の光明に  
輝いて椽の下  
の力持を爲す  
は近年の流行

差一置き申すべき、ナドと馬鹿物の口色をつか  
い、美聲自慢に勇み返れば、何だかオツ一理にか  
らみ、熊本城を枕とし、打死するよな心地して、テ  
モまた心氣に堪へ難く、殊に風流社會の自由酒  
義にも違ふとなれば、野暮な小言は盃洗へ流し  
一杯、陽氣に、サ一きたせー、  
口先で嬉し鳥か面にくらしい  
眞日はれたら阿房と鳴き

月論

月は穴と音み、中央に深き穴あり、夜間杵もて之  
を搗くものあり、俗に兎の餅搗と云ふ、通例十ヶ  
月にして一白おわる、其時杜鵑オギアと鳴く、但

し餅の色赤きを以て、赤ン坊と名づけ、珍重する  
と限りなし、神佛の鏡餅に、紅を塗るも、是れより  
始まりしとなん、然ばてそ昔より、穴賢々々と唱  
ふると、拜神の言葉と爲り居れり、  
さても月に、種々の名あり、一六の両月を紋日月  
と云ひ、又た上方にては、偶數の月を、赤鬼月とい  
ふ、紋日月には、傾星光衰へて、工面山にかゝると  
あり、中には、金星と呼ぶる、ものは、類に無心の  
光明を放ちて、客星に迫る、左れと存外、越中風に  
吹れて、的の外る、とあり、故に孫月の名あり、又  
た赤鬼月には、貧星途方の暮より、途轍の烟にま  
かれ、道線の雲切れて、返星、辰星、に追ひ廻され、鬼



今日の月をみ  
ば更に哀うか  
らん

門にさまよふとあり、故に雨露月の稱あり、此時  
苦獅子雷獸と爲て驅廻ると云ふ、其外上戸の手  
を離さぬは、酒月にして、小供の待ち兼るは、餅月  
なり、洋食の賭銭は、玉月にて決し、戀の叶ふは、目  
月にて知れる、三更踏月來と、云ひ送る女史あれ  
ば、月落鴉鳴霜滿天と、吟むる書生あり、月雪花に  
酒と三味線は、地獄太夫の落書なれども、月みれ  
ば、千々に物ころ哀しければ、大江千里の名句な  
り、月に風情の待乳山を歌ふ、若旦那あれ、月が  
重なりや、お腹が大さくなる、と、哀むお三どんあ  
り、二月三月は、袖にて隠せども、六月に満れば、質  
の流と爲るべし、無間の鐘を、月たがる慾張者あ

梅毒は身体の  
自由害する悪  
癩當時頗る猖

金は泥坊尻  
の碎ると早

れば、田毎の月に杖をひく、風流人あり、女の羽織  
は、黒紋月が流行し、七夕の頬月は、金掛を重寶せ  
り、洋服の代金、多くば月崩にして、權妻の給料、大  
抵、月定めなり、月に四回の検査は、あれども、未だ  
梅毒の根は、月々、月々、借金殖るときは、年季の  
月るとならん、紅樓の月は、醉眼を喜ばせども、配  
處の月、客腸を斷つべし、石山の月は、顯如を悲  
ましめたれど、赤壁の月は、孟徳を誇らしめたり  
盟の月は、谷五郎の難題に應へ、深底の月は、猿猴  
の不審を醒せり、月夜に釜ぬく、泥坊あれ、月ヶ  
瀬に枝を折る、梅道あり、辨慶が胎内に在りしは  
十八ヶ月にして、釋迦の生れたるは、三年三月目

自由の月より  
は角燈の光が  
明るからん

否と月とめた  
る事もあるん

なり、穢巾を無月と云へど、汁粉に十二月あり、扇  
の的に月立たる矢は、與市の功名と爲り、かき  
も、母を月とめたる竹槍は、光秀の運の月と爲れ  
り、これ見たまへ光秀殿とは、佐月の愁嘆にして  
刀痕と聽て尻餅を月たるは、與市平の女房なり  
石川五右衛門は、世に盗人の種は月まじと詠み  
パトリックヘンリーは、自由の命脈月たりと論  
せり、池月は高綱をのせて、宇治川の先陣を爲し  
月照は勤王の爲に、海の灘屑と爲れり、詮方月て  
上書を月だしたるは、佐倉宗五郎にして、幕府を  
月倒して、泰平を謳へるは、明治の民なり、去れど  
斯く月とめ無き事は、月せぬ流れ清元の歌ひ納

地の障は血の  
障即ち治の障  
なり

不淨を受けて泣  
寝入にする者  
は昇屋の親玉

めと爲り、偕て東西と更めて、説き起すは、月蝕の  
事なりけり、  
抑も月蝕は、俗に月の障りと云へども、實は地の  
障りなり、故に此間は陽物、即ち大陽に向ふと叫  
はず、併し傾星の如きは、此等に頓着なく、横道を  
巡るが故に、頓馬なる客星は、想ひも寄らぬ、不淨  
を受くるとありと云ふ、惣じて月蝕の時は、口紅  
の色黒くして、艶なく、甚だしきは、紅猪口まで、眞  
黒に焼るとあり、又た腹道に痛みを覺へ、事の外  
難義するとあり、痛みを疼月と云ふと、是れより  
始りしと聞けり、或傾星、疼月の甚だしきが爲め  
客星を避んと欲し、其由を請ひしかども、動女星

自由權利は抑  
安の防害

ハテ廻氣なる  
女武者也

の勢強くして、意の如くならざるのみかわ却て  
痛き呵責にあひ、我儘者よ横道者と怒鳴散る  
苦病さに、理前を演れば打懲着、牛馬に劣る虐待  
は、此世からなる六地獄、自由も權利もなき膨す  
眼蓋の涙はやり来て、乾く隙なき襟袂袖ない事  
と知りながら、いふに言れぬ紛れ髪心も髪も乱  
れ染め、道瀬がたなの結ばれて、緋き抜く革命史  
客を佛蘭西人民が、昔の苦勞を懐ひ起で、身に  
まされてか轉び伏し、ヨ一と一聲ほど、ぎす程  
經てやうく、こゝろ月影も高尾の流を酌み二  
度と勤はせん臺節にて、自ら心を慰むる爲めに  
や、人目忍ぶの走り書きに、左の如く認めたるぞ

をかしけれ、

佛蘭西革命の起因を問へば、天定まりて  
人に勝つ、運の月かよ月魄も、盈れば戻る  
十六夜の、まだ年若の路易王が、お月の貴  
族に惑はされ、黒白もわかぬ怨の暗權利  
の黒髪ひき纏り、專制の櫛齒手荒くも、民  
の膏血をそき取て、天下の患を白妙の鹽  
の税まで厚化粧顔は白くも腹黒き苛さ  
政治を解かばるに、却て結ぶ襟飾り、咽喉  
をしめる禍は、月日と共にまを鏡どき濟  
したる竹槍の、切先揃ふ席旗、うへを下へ  
と蹴へり、萬國一の名にし負ふ、巴黎の御

此仙台節は輕  
節より甘一  
めて自由料理  
のダシとなり  
ん

辨星は遊説  
綴すべし

所の有様も忽ち變る修羅地獄血潮の海  
に屍山空吹く風も眩暈く一時は身毛が  
よだちしが嬉しや鬨に、(コリヤナン  
ダイ)自由の花

星論

星は欲なり干なり又た可爲なり勢なり錢星土  
用星より多星無星止薩星等に至るまで悉く之  
を數へ擧ぐれば五大洲の人口より遙に多きと  
ならん、これは昔千年より言ひ傳ふる如く人々の  
禍福吉凶を司れる星の外別に遊星とて何の用  
をも爲さず遊び居る星の多きを以ても知らる  
べし、去れば娘子供は、智星と祈り念佛婆やはお

腰拔壯士八舟  
幽靈の相續人

賽錢星と祈れり、陪從看劇星と祈るは藝妓の紋  
切形にして、乞購食物星と願ふは安女郎の定文  
句なり、餅星と祈る下戸あれば、酒星と願ふ上戸  
あり、薩摩芋の切星は貧乏人の腹を肥し、淀屋橋  
の木星は、烟草入の摸様に残り、牛乳を星て乾  
酪を星れば、馬骨で星したる烟管筒は、星店に  
多し、博多の帯に星が入れば、質直が下れども、星  
祭の團子は、棚頭に上れり、道明寺の星飯が、珍客  
の茶浮と爲れば、鏡餅の星は、小供の退屈醒と爲  
る、杓星杓貸星は、舟幽靈の口癖にして、水星一杯  
飲星は酔覺客のお定まりなり、意見しやん星と  
歌ふ猫妓あれば、米代渡星と怒鳴る赤鬼あり、初

星雲に登らざ  
るも星史に登  
れば足る

手は膝かどか星めす武后あれば星氣盡て願で  
蠅逐ふ作藏あり清水星玄は破れ衣に破れ笠と  
零落果てたれども東海道で隨一の普請は興津  
の星見寺なり星心一到何事か成らざらんと云  
へども星雲に登らで果る書星あり女郎屋を星  
樓と呼べば女郎に星糸あり自惚先星が身を持  
ち崩すも起請星詞に星心を奪われし故なるべ  
く新聞屋が星誤を出すは誤りの星を打れし故  
なるべし亞米利加の國旗は星章にして細川侯  
の定紋は九曜星なり辨慶の筆そめしは樓の星  
札にして勝頼の星がるは星章の兜なり武田の  
逆臣に星科彈正あれば鹽谷の忠臣に大星由良

都一氏の所  
謂どう星いた  
かる此手枕は  
主に因れ骨  
と皮

臨  
臨  
臨

之助あり九郎判官は鳥星岩に由縁を遺し唐土  
の唐虞は重目星に帝位を遷れり自由軍星を  
起して星府を倒せし佛人あれば條約改星して  
星と星願する國人あり此外まだ書ま星と  
思ふ事もあれど書てよいやら悪いやら一寸先  
は闇雲のあふない政談は止にして去ば是より  
傾星の謂れ因縁故事來歴芥もくたの煤掃に取  
り掛るべし  
傾星俗に金星と云ふ淺くとも月  
様じやあるまいし宵にチラリと見たばかりと  
は此星の事なり故に宵の明星とも云ひ又た其  
さぬくの容星を送るためハタン々々々と

昨是今非ハ浮世の夢覺て後ち落膽する人多し

子雲を下るが故に、明の明星ども云へり、其光は  
見もぼらしと雖も、毎も白雲紅霞なんどに包ま  
れ、夜目には一寸白砂糖の如く見ゆる處から大  
白星ども呼べり昔ある毛唐人の山の神は、此星  
を夢みて懐胎したるに依り産み落したる小悴  
を、太白と名つけたれども、此奴中く洒落者にて  
生長の後ち甘物好の下戸とならで、存外世にも  
珍らしき底、抜上戸と爲りしとあり、俗に夢は逆  
夢と云ふと、是れより傳へ始めしとなん、  
又九傾星には、陰星と唱ふる附星あり、俗に之  
をマブと云ふ、此星の來るときは、傾星忽ち戀風  
を起し、心の駒狂ふて頸筋さむく、身中の頭ひ動

客星の謎をマブが吸ひマブの尻を客星が拭くは東洋の美風生命に別條なければ結構

萬事甘するを太白と云へば昇回根生は三流砂糖

くこと限りなし、此時來れる客星は殺風景に吹  
き飛され、憤怒の焰を放つもあり、愁嘆の雲に隠  
る、もあり、故に古代の通學者は隣座敷は間夫  
の客こちらは一人不眠の番、煙草はなくなる火  
は消る、生命に別條ないばかりと云へり、原來傾  
星が笑ふてつらいとは、客星に接する夜にして  
泣いて嬉しとは、マブに遇ふ晩なりと云へば、此星  
の爲めならば、無心の毒氣を吹きかけらる、ど  
も、二重返辭の大呑込、七八置ても、九回するとな  
らん、故に金星なり、又た如何なる事を云はる、ど  
ども、甘じて之に従はざるとなし、故に太白の名  
あるなりとも云へり、又た一説に、マブの側への

借銀山の動物  
を負辱と云ふ  
故に獵り出さ  
る、時は權厚  
と爲るならん

み〇〇〇〇て容星に近寄らざるをふると云ふ、而し  
てふ〇〇〇〇の色は白し、故に太白と呼ぶなりと  
も云へり、  
抑も金星は、我地球に似寄れる、一〇の世界にして  
四季ともに、輕薄風烈しく吹き、人情と共に腰手  
足の寒さと甚し、折く空泣の雨ふりて、玉面の田  
を濡すとわれども、到る處人間の道たぬて、借銀  
の山高し、故に上方邊にて、お山の名あり、我地球  
は、大陽東より出づれど、此世界は、南より出で、我  
の午飯は、彼が朝飯時に當り、彼が夜半の高廟は  
我が朝飯の鐵瓶に、響きてリン／＼たり、されば  
昔より、一日に二食の定めにて、柴廻は臭澤菴か

萩餅燗芋の贅  
澤費と爲るを  
知らず誰で献  
納する容星の  
心中こり憐れ  
なれ

傾星に一本槍  
とは是れ男題

精進の味噌汁にあらまば、鯉節の煮糍なり、一月  
三ヶ日の細吹物を除く外、更に魚類を添へると  
なし、故に其口身しきと、餓鬼道の亡者に似たり  
若し少く、錢にてても、手に入れば、直ぐ焼芋とか  
萩餅とか、金鑊とかの、買喰をせざるとなし、而し  
て其喰ふと、バ／＼然として、馬の如し、故に汚  
天馬の名ありと云ふ、  
此世界の住民は、アバズレ人種と稱せられ、爪長  
くして舌二枚あり、大抵三十年を一生とし、三十  
五年の長壽を得る者は、至て稀なり、藝能とては  
兵事の本槍にて、床の海の舟師、屏風が楸の逆  
落を始め、枕返の程、栞等の早業を究められども

河童の尻へ薩  
摩芋萩の餅の  
尻と執れがく  
さき

闇は足れ財産  
の陥罪

學問なんぞ云ふものは、丸ッ切合点せせ、尤も近  
頃は學校の設立も、わるよしなれども、稽古に行  
くよりは、午睡する方が、安氣だと云ふ流義なる  
を以て、相變らむ折釘を寄て文字と爲し、蚯蚓を  
集めて文と爲し、義務人情なんぞは、河童の尻の  
垂れ流しと爲すに過ぎず、故に心は衣裳の色揚  
と共に變り、情は蠟臺の蠟燭と共に消へ、金の切  
目が縁の盡き、お前は親切私や勤務、錢が出来た  
ら復たお出で、掌かへす樂變化、實に慾界の外道  
ならずば、十惡きはまる夜叉なるべし、併し外面  
は如菩薩にて、玉の顔色柳腰、笑ふ壓は梅の花、こ  
ばれ掛れる愛嬌には、不思議に狂ふ意馬心猿空

大盡風當時殊  
に燈

雄雉がきてイ  
トウ心配する  
者は口ロい世  
界ふ幾等もある

と眞の岐路を、迷ひくるは、の奥二階へ登りつめ  
ては、浮雲の空、是非の判断、搔き曇り、雨に濡るを  
喜べど、ふると聞ては、氣にかゝり、前後忘れて、氣  
を張弓、矢竹の勇に、濡れども、大盡風のふく紗と  
共に、心の裏の板に、復た遇た、と爪りし痕は  
紫縮緬黒七子、させる羽織のうら約束に、屹度と  
かへす襟元より、ゾットする河の富士額、朝日輝り  
添ふ白雪の解て、嬉しき縞子の帯、くるふするの  
も、當世なれど、忽ち難義が、黄八丈、蒲團の島へ配  
流されて、家へ還れず、錢はなし、憎らしひよと咬  
着れし、其口紐が、背の紋、馬鹿の章と指さるる、  
に至るは、古來有項、天を廻る、客星の常なるべし、



無常の聲を聴くハ氣の毒なり

此等の客星は、竟に退去を命せられ、流星と爲て  
 光明を失ふとあり、此時掛取の赤鬼、底附の怨靈  
 等、無常の聲を現し、往生觀念佛を唱ふと、物凄く  
 も哀れなりと云ふ、  
 去り乍ら、客星變じて、流星と爲ればとて、強ち廢  
 物と爲り了るにもあらざ、また來る春を迎へて  
 古木の花と共に、麗らかなる光明を現すとあ  
 り、且つ流星中には、最も貴き星の、混じ居るとな  
 れば、或る光線學者は、却て世の常の星よりも、之  
 を重すとあり、實に戀は思案の外道、夜叉、自由  
 を望まずば、不自由をせまじ、只だ賈かくる二世  
 の契約に、三千世界を狭くして、人目を包む類被

烟火社會亦た流星を貴ぶ

鬼角浮世ハ覺悟次第

雲行ながめて、茫然と待つ身は、つらき置匣燵、あ  
 つき涙の勇泣、齒を咬縛り腕扼り、屹度覺悟のあ  
 らひ髮、櫛齒を入ねば解もせず、結ぶ赤繩は會者  
 定離、無常を知らず、涅槃像、羅漢薩陀も、犬猫も、愛  
 を分つ平權主義、自治の心に富元か、清元竹本歌  
 祭文、うれにはあらで、出雲節、結縁の神へ起願し  
 て、此世かなへて給はれと、紅葉のよふな手を合  
 せ、拜む惟は、あらし山色香も、今は散り果て、哀  
 れ彌増す流星を、吊ふ爲めにや、當時此世界に於  
 て、左の如き俚曲が、流行ると聞けり

今度此度保安娼合の弘布について、數多  
 退去者のある中で、私の好なは、只だ一人

今こそ他所へ  
出雲でも聴て  
時節に大社歌  
の文句も亦た  
有難いと云ふ  
べし

酒宴石の熱氣  
ハ天を焦すに  
聞けり

三十  
色が黒くて背が低て、目元パッチリ鼻高で  
口元尋常で齒が白て、八握の鬚を撫でな  
がら、パツパと吹きたすシガレット、けむいと  
見へて狸等は、口を押へと氣をあせる、覺  
れど故と知らぬ顔、オールドブルコートを着  
流して陽に飾らぬ金時計胸に入れたる  
意見書は、言論集會減租論、つき添ふボリ  
スに目もかけぞ、雄辨揮つて時勢談慥に  
主義はリバーチ、りれまで細く聞たれ  
ど、肝腎要の交際をしなないばかりが苦に  
爲て、夢かうつ、か白波の荒巻く政海打  
越て、自由の城を枕とし、打死するよな心

地して、モ一度逢ねば、(ノホ、イ)戀れ死ぬ  
借て此世界には、物産頗る多し、就中尤も有名な  
るものを、酒宴石とす、此石は一名懇親塊と云ひ  
小は六疊敷より、大は百疊敷に餘るものあり、い  
づれも表面は、五色の綾ありて美しく、時々微妙  
の音響を發するとあり、併し打碎きて其内面を  
看れば、或は獅子の熱血の如く、紅きもあり、或は  
鯨の口毛の如く、黒きもあり、或は稻麥の葉の如  
く、青きもあり、又た其形とても、鐵砲丸の如く、圓  
きもあり、熊鷹の嘴の如く、曲れるもあり、鯨の頭  
の如く、角なるもあり、其中紅く圓きものは、量も  
大きく、價も貴しと云ふ、然るに近年寒氣の烈し

兩狸一に夜猿  
と云ふ幣も赤  
面すると多し

きたため、此石碎け犬姫の玉の如く四方へ飛散せ  
り、依て之を怒犬石と稱するものあり、閑狸等は  
其行衛を捜ね歩くと云ふ、  
抑も傾星界の言語は一種特別にて容易に解し  
難しと雖も、今其二三を掲げんに、硯箱を當り箱  
と唱へ、通人振る者をチタンチンと唱へ、上等を  
タテヨコチヨンと唱へ、下等、をヨコタテチヨン  
と唱ふ、併し女郎の上等は、サラクと云ひ、下等を  
ヤナギと云ふなり、土俗古來お茶を嫌ひ、お茶挽  
女郎と云へば、身ひと黄の如し、又た金星とても  
只だ毒龍惡鬼の責苦に、遇ぬまでのとにて、無論  
自由に動くとを得ず、出居の襖わけ暮に、哀しき

傾星の年季と  
専制の時代は  
天から種子

海王星一に國  
海王星と云ふ

失へる權利を  
貸ばやと氣を  
奪が故に寅の  
春を待ち来る  
ならぬ

この打續き、年季の明を松ヶ枝に降り積む雪と  
諸共に次第に重る月税を納め兼てや藝科の苛  
をかこつ言葉草花咲く春の文明風は、何處を吹  
くやら白菊の葉末くくに置く霜も解て流る、  
海王星、其徳光も近づけりと憂が中にも勇み駒  
嬉野森の古狐かも白狸の腹鼓、ヨトイボンと  
の打ち納めに、正へる狸頭は左の通り  
もび折れば、最早年季も今しばし、つらや  
苦海は權利なく、義務の重荷で、身も細る  
待ちかねますぞへ、寅の春

風論

風が空氣か、空氣が風か共に無分別の同

風へ思案の外を吹き怒風ハ算用の中に起る

京に田舎あり文明に未開あり

り、故に空吹風と号へ、馬の耳の聴流と爲る、され  
と色氣より起り、襟元を吹て身の毛の逆立つ程  
ゾットせるものを、懸風と号へ、否氣より起り、臘月  
夜の影まで、吹き飛すものを、秋風と号ふ、秋風に  
吹る、者は、氣を紅葉の落散りて、妻かふ鹿の哀  
れを、催すとあり、懸風に吹る、者は、ソクく  
ばせ上り、有頂天に行吟ふて、夜這星の流渡と爲  
るとあり、其外、大盡風の吹く時は、黄金菊時をに  
顔に咲き榮ゆ、重寶さる、と限り無く、利太風の  
吹く時は、不知火の影と共に、財布の底も、鏡紫の  
隙なりとて、爪弾せらる、と多し、西より吹く風  
を、文明風と号へ、東より起る風を、未開風と号ふ

リドイフてい  
つの撰分が肝  
野  
併一蒸功に依  
て銘金を下賜  
せらるると云ふ

書生風の吹き  
荒るとまハ青  
海の鯨肝を撰  
すとあり

又た近來は人穴風と号へ、ふじに起る風あり、此  
風の起る時は、戀の海に、身を浮舟の鯨猫も、磁石  
の針の方角を失ひ、楫とり兼て、尻に帆を掛け却  
て、爵金の暗礁に、乗りあぐるとあり、故に一名猫  
嵐とも云ふ、常に待合沖に起ると多し、  
書生風、俗に喰嵐と云ふ、此風起るときは、磐林の  
揺動甚だしくして、鰐口の響聲やむ時なく、玉山  
忽ち崩れ、鍋の海底を見はせと速し、濱焼の鯛、眠  
玉を吹き飛され、煮揚の鯨、頬身まで吹き荒さる  
鯨は、思案の外、食は算用の中、間斷なく吹き續き  
て、太鼓の原に、到らすんば罷ます、動もせれば、向  
水を吹き起して、土手切と爲り、高野山をあらせ

前江飛ぶ昆布  
口隠る眞夜半  
に何とて料の  
盡りよからん

祈れば必ず利  
益あると妙な  
り

とわり故に山嵐ども云ふ此風傾星界に到ると  
きは手箆等の煎餅鏡臺の山昆布何時の間にか  
ら影を隠すとわり風を食氣の發動なりと云ふ  
と、是より始りしどなん、  
様子風一名否嵐と云ふ膝元の扇より起り鼻先  
を吹く、又た額へ當て、パチ、鳴るとあり此風  
起るときは心の駒下駄も狂ひて石に跌蹠くと  
あり、空泣の雨降りて土藏の屋根が漏りだすと  
あり、併し傾星は此風に吹れて光明を増し一時  
は山吹色を放つとあり故に三日にあげず吹ん  
とを願ひ、若し數日吹き來らざる時は左の如き  
經文を唱へて、風伯に祈るを例とす

戀しさの餘り、一筆染めしあげ、  
はようぞや、おん出くだされ、まみく、嬉敷  
おん禮申上り、兼くおんめもじの上は、い  
ろく、おん語らひ申上度、積る話ば山く、か  
はしまし候ところ、餘りどや浮き立つ嬉さ  
に、心の駒も狂ひ、言の葉草も後や前と、相成  
り、おん疎みの程もおし測らむ、由なき我儘  
言に夜を明し候事、今更おんはづ、しぞん  
じり、その砌一寸おんはなし、申上置候と  
はつき、さうく御見を得申度候ま、今晚  
はせひく、おん越被下度、神かけ念じあげ  
る、左なきだに、戀に浮身を投島田心の丈

文の心へ湖邊  
なれど愁のこ  
い字が書てあ  
ると是れなり

をつげの櫛、おはせ鏡と明暮に、祈り居候事  
におはしまし候ま、不便の者とお思召草  
の葉にとまる蝶、くのおん二心なく、末の松  
山末ながく變らぬお情を被り度、寔に粹な  
浮世を戀ゆへに、野暮に暮すも心柄とは申  
し乍ら四五日逢ねば、このやふに、瘦る、も  
のかど、我ながら驚くほど、あてがれ居候心  
根を御推もじくだされ、今宵は御違せなく  
お出被下度、たいく時計かぞへて、おん待  
ち申居候、あらく目出度し  
逐風一に嵐と云ふ、此風は幽靈の濱風に似て、濱  
風にもあらず、六萬眼皆殺の神風に似て、神風に

獣の獅子ハ猶  
は自由の志士  
の如きか成程  
猷白山ハ白獅  
子

超犬ハ野に吠  
へ限犬は風に  
吠ゆよを守る  
とはよく言ふ  
たり  
千石船までか  
へるとはテモ  
呆れかへる風  
カ

もあらず、昔時陸儼は、牛馬見風則走と云ひしか  
とも、此風は牛馬は愚か、自由否な獸中の王と知  
れたる、獅子を吹き飛すの強力あり、但し其吹起  
る時は、雞乍ち退去骨髄と啼くに依り、退去風と  
も名け、又た眠犬驚き覺て、ホアンとととと吠る  
が故に、休安嵐とも名く、俗に素張嵐とも云へり  
當時流行の端唄に、娘十六七は、嫁入盛簞筒長持  
扱箱万事の用意調ひて、目出度結納も済たれば  
一室の内、母親が膝元近く呼び寄て、行は必ず  
還るなど、愛情をこめし教へ草去とは母さんそ  
りや五無理、東が曇れば風と爲り、西が曇れば雨  
と爲る、千石積だ船でさへ、海が荒吹ば、(ノホ、イ)

四は千里の筋  
さへ走ると云  
へば獅子の千  
里徑むに足ら  
ず

只に粹な浮世

かへるもの」と云るが如く此風は東より吹起る  
が故に吾妻風と云ふ者もあり此風に的られた  
る獅子は近くて三里以外遠きは千里の外へ吹  
き飛されたるもあり去ば開闢以來の烈風なり  
とて、ビクク仰天臺に登りて雲行を窺ふ者多く  
晴雨計の沈降する毎に罌丸の昇騰する者も亦  
た少からずどの風説あり  
抑も君子の徳は風なりと云へども大盜賊に魔  
風あり梅ヶ香薫る春風に二枚屏風を置き隔る  
は、好多同士の娛樂なれども秋風寒く身にしみ  
て、ゾット素肌の見すばらしさは色男の零落なり  
風吹ば興津白波立田山は夫を想ふ名婦の名句

欠

MISSING



霜谷女史曰 総論より風論に至るまで、  
 越の意茶月、暗室の握屁、聲と句の暗號を發  
 して、啞八百の電信を通じ、瓢箪で鯨の押付  
 往生論を、時出ども、ア、せし狐政の正体を  
 見さるるが故に、倉窓から鬼が尻出て、天地  
 の裂よな屁を垂た、と一般、面黒、笑敷、オ、臭  
 の三段論法に合ひ、九段の處を、狗が甜るよ  
 な妙味あり、亦是、金毛九尾の老手と謂べし



明治廿一年四月十日印刷竣功  
全 廿一年四月廿二日出 版

定價金拾五錢

著 者

大阪府平民

脇 田 房 吉

東區淡路町貳丁目  
四十番地

發行者

大阪府平民

安 井 兵 助

東區南久木瓦町四丁目  
三十三番地

版權登錄

山口縣平民

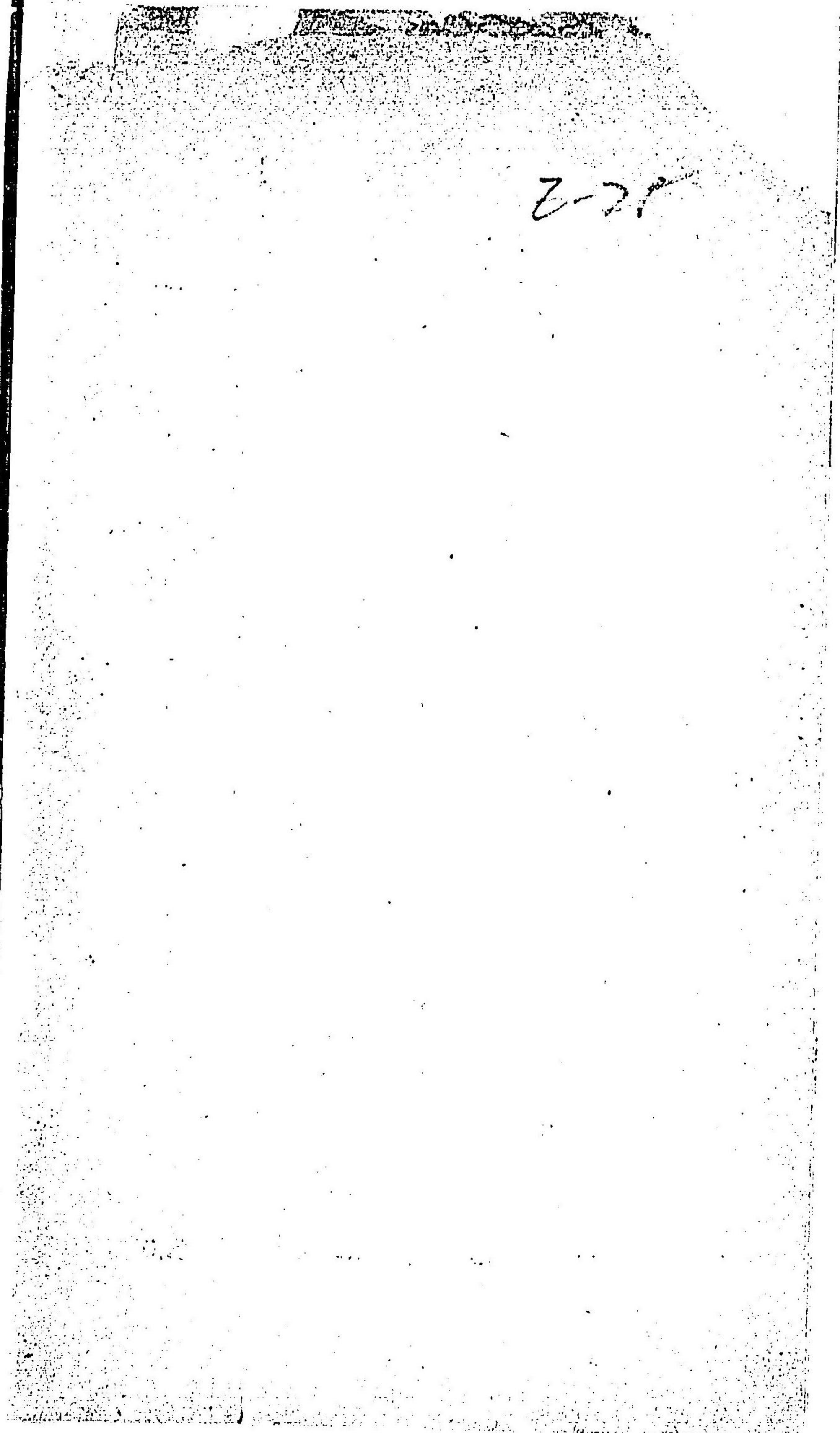
印刷者

岡 谷 梅 太 郎

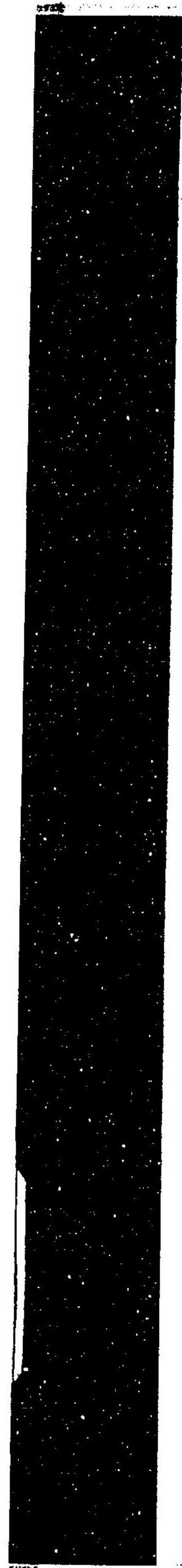
大坂末吉橋通四丁目  
二十番地寄留

賣別處

西區京町堀通科子板橋北邊西へ入  
三三三 三三三



2-28



狐政學

洒落齋居士

国立国会図書館

091647-000-8

特52-350

狐政学

洒落齋居士 / 著

M21

DBO-0101



牛